

茶話

日本茶インストラクター
協会熊本県支部会報
平成17年7月1日発行
増刊号

矢部茶の郷巡り

& 鑑定研修会

藤原会長の茶園・工場を視察



去る六月五日、「矢部茶の郷」めぐりと題して、上益城郡山都町にある藤原会長の茶園視察や工場見学が実施されました。当日は会員17名が参加しましたが、初めて茶園を訪れるという人や、初めて製茶工場の中に入るといった人も

あり、貴重な研修になったことと思います。

午後は、熊本市の健康文化ホールに会員20名が参集、鑑定研修会が開催されました。研修ではインスト二次試験を想定して、今年の入札に出てきたお茶をサンプルにした茶期鑑定や、仕上げ茶の品質鑑定などを行いました。

「厄入りの宴」を開催

同日夕、熊本市内某所において、会員の中で本年厄入りを迎えられる斉藤さんと中村さんの「厄入りの宴」が行われ、会員16名の参加をいただきました。

そこで、「厄」を口実にお二人から寄稿いただきました。

「厄入り」に想うこと

斉藤敏春

私は昭和40年生まれの40歳。この度厄入りを迎えることとなりました。

私に住む旭志村は、三月に市町村合併し、菊池市になり

ました。我が家の近くは蜜の名所として有名で、毎年のもタルフェスタには一万人を超える人出で賑わいます。私はそこで、茶の栽培・製造を行っています。

さて、インストラクターにとしての使命は、美味しいお茶の入れ方を通してのお茶の普及活動、そしてリーフ茶の消費拡大に尽きると思います。もちろん、茶生産農家としての望みも同じで、それに加えて茶価の高値安定です。

近年の茶業情勢をみると、ドリンク原料の高騰は悪い事ではありませんが、肝心の一番茶が低迷しては本末転倒です。茶業界の救世主としてのインストラクターの役割は、今後さらに大きくなっていくものと思います。

静岡の茶の学校を卒業して20年、お茶は本当に奥が深くで、まだまだ知らないことだらけです。幸い、友人や周りの人たちに恵まれ、助けられてここまでやって来ました。これからも、愛する妻と可愛い娘二人、そして秋整枝が終わる頃に生まれるであろう二人目の子供のためにも、「お茶」という仕事に感謝し、愛して、一生懸命突き進んでいきます。これからも宜しくお願

いします。

「厄入りの宴」のお礼

中村友香

この度は皆さまに厄入りの宴を設けていただき、ありがとうございました。昨年よりお茶を通してお付き合いをさせていただくようになり、生活のなかで茶の存在を意識することが多くなりました。

そして厄入りを迎え、ふと思いついたのは、実家の母がどんなに慌ただしくても、いえ、旅行や試験の朝など慌ただしい時こそ、必ず「その日の難のがれ」にと茶を淹れてくれたことです。

母自身も祖母から教えられて習慣になったようですが、日々の忙しさの中に、ふと心を鎮め一杯のお茶を飲むための「間」を持つ、そうすることが大難を小難に、小難を無難にしてくれる心のゆとりを生むという、古くからの経験が生んだ知恵なのでしょう。改めて茶というものは喉の渴きを潤す飲み物というだけでなく、私たちの心をも潤してくれ、欠かせない存在なのだと思えます。

厄年にあたり、今年には特にこの心構えをもってお茶に親しみ、無事に過ごしたいと思っています。また、これからお茶の縁で知り合うことの出来た

皆さまと集い、新たなお茶の魅力と出会う機会一つ一つに「一期一会」の気持ちで臨み、勉強して参りますので、よろしくお願ひ申し上げます。



次回からはリレー・エッセイ、お一人の御指名により、市川辰太さんと田中自子さんに執筆いただきます。ヨロシクお願ひします。

「新種ワイルド発見」

熊本市内のお茶屋さんの話によると、赤ちゃんを抱っこした若いお母さんが来店され、「普段はペットボトルだけど、茶葉でお茶を飲んでみたい」と緑茶を買って帰られたそうです。

暫くして「美味しくない」との苦情の。よくよく聞いてみると、お買いになった茶袋の封を開け、その中に直接お湯を注ぎ込まれたとか…。店主曰く、「返す言葉も気力もなかった」とのこと。茶葉でお茶を楽しむものには、危機感さえ与えます。

インストラクター協会にはまだ未報告のワイルドだけに、対策用のワクチンの開発が待たれるところです。(談)

役に立たない

豆知識

「厄」ってなあに？

皆さんよく「厄払い」という言葉を聞いたことありますよね。ほとんどの方では「厄年」のほつがご存知かもしれませんが、この「厄」に関心のある方は厄払いに出掛けられたり、厄除けグッズなどを持ち歩かれたりされますが、知らずに過ごされる方もいらっしゃいます。

そもそも「厄」とは何か、起源は中国の陰陽道にあるようですが、日本では平安時代に、陰陽師安倍晴明が広めたときされます。この陰陽道をもとに、日時や方位の吉凶が定められ、人生にも節目があり、災いを招きやすい年として厄年が登



場したようです。厄年には肉体的、精神的、社会的な変化が訪れるらしく、男性では四十一歳、女性は三十三歳が大厄とされて、前後三年間は気をつけよといわれます。

「厄なんて迷信だ」と思われるかもしれませんが、厄年に事故にあつたり、入院したりとそんな話も多く、あながち迷信とも言い切れないものです。

大厄だけでなく、厄とは人生の中では幾つも見られます。ただ前を覗くだけで人生を突

タイム

個人タクシートの運転手、それはプロ中のプロ！

都会で見かける個人タクシードライバー。皆さんがタクシードライバーを利用されるなら、タクシードライバー会社それとも個人ですか。「個人は信頼できないから」といっは大間違い。じつは誰でも個人タクシードライバーにはなれないのです。タクシードライバー会社は第二種免許を持つていなければならないのですが、個人はタクシードライバー会社に十年以上勤め、三年間無事故無違反に加え、さらに試験に合格しなければなりません。まさにタクシードライバー運転のプロ中のプロ。今後、規制緩和で個人タクシードライバーが増えるという噂もありますが、どこかの官僚さんたちも、黒塗りのハイヤーをやめて、安全な個人タクシードライバーが良いのではと思つたのですが…。

【活動報告】

つ走るのではなく、たまには身の回りを見渡し、歩みを止めてみるくらいの余裕を持つことも大切なのかもしれません。背中に炎を負い、右手に剣、左手に縄を持った不動明王が厄除けの仏様。一度お参りに出掛けてみませんか。

第二号で寄稿いただいたおりました森山さんからの活動報告をご紹介します。
初 肥後茶女「人吉研修
森山亜天子

この研修は「肥後茶愛」の第一回記念の研修でした。女性部の発足について、「一般的な組織運営は、男性思考に偏り活動も広がりがなくなる」と男性側から発案されました。総会で有働前支部長よりお話を聞き、インスト男性諸氏に、頭脳の柔軟性と好感を覚えさせました。期待の中生まれた「肥後茶愛」でした。

第一回研修を人吉・相良に選んだのは正解でした。人吉市の立山商店では、博物館入りできる木製機械を美しく保ち、現役で活躍しているのを見せただけでありません。立山家の日常生活が美しくなければ維持不可能でしょう。一方



相良村では新型の機器を導入して精力的な生産をされ、昨年の九州お茶まつりで大臣賞を受賞された川上氏の茶工場を見せていただきました。家族の協力と前進するエネルギーが莫大でなければ頓挫するでしょう。

どちらが正しいとかおいしいお茶か？ということを超え、共にお茶の歴史の真つ只中で茶業を営まれていることを感じました。温故知新を想つ第一回活動であったと思います。最後になります、広辞苑によると「インストラクターとは指導員。機器の操作など特定の技能やスポーツの訓練を行う人」とありました。自分達が「インストラクター」であることを忘れず活動したいと思っております。

【お宝画像！】

熊本県茶業組合総会合議所が、昭和8年1月に発行した『肥後のお茶』という本があります。それに掲載された写真です。説明には、「文豪徳富蘇峰翁の命名せる「桜野茶園」の遠望（所在・豊北郡水俣町薄原・三年生）」とあります。

『熊本県茶業史』には、「松本勝喜、吉野友義が中心となり、十一名で桜野上場に茶園二町七反歩を設置した。開園に当たつては、県技手安藤康子郎（のち静岡県茶業試験場長）が指導した。昭和七年三月、徳富蘇峰により、「桜野園」と命名され、茶園の高台に記念碑が建立されている。」とあります。



(味な歳時記)

宴会時に知っていると役に立つモノ特集です。でも日本茶の普及はお忘れなく…。

栓抜き無い時はピンで栓抜き

「さあビールを飲もう」とし

た時に栓抜きが見当たらない

事ありませんか。こんな時

ピンだけで開けられます。ピン

を一本用意します。開けた

いピンのフタを、支えにする

ピンのフタにひっかけます。

そのまま二本一緒に床から五

cmほど上に持ち上げておろし

ます。すると、簡単にフタが

開きます。これで何本も開け

ることが出来ますし、最後の

一本も空き瓶にフタをして開

けられます。

フタが開かない時は逆さまに

スクリューキャップのピン

のフタが開かない時に試して

ほしいのが、ピンを逆さまに

して開けるといふものです。

一見簡単すぎて信じられない

でしょうが、成功の確率は

50%。でも、中身の飛び出し

には要注意ですよ。

イヤな臭いはリンゴで一発

にんにくやガーリック入り

のものを食べた後は、口臭が

気になります。そこでリンゴ

がオススメ。四分の一個を食

べると大丈夫。リンゴに含まれるポリフェノールと酵素が効果あるようです。お茶にもあるのですけどね…。